

ノリの不作、アサリなどの漁獲量の減少傾向と工事との関連性は疑われるが、認めるまでには至らない――。

五月一六日、福岡高等裁判所が諫早湾干拓工事の差し止めを取り消す決定をしたことは、干拓事業の見直しと水門の開放によって有明海を再生させようと期待する多くの有明海漁民を落胆させた。そして、農水省は干拓工事が始まって以来続く有明海の異変と干拓工事との因果関係を明らかにするそぶりも見せず、昨年八月の佐賀地方裁判所による工事差し止めの仮処分決定から九カ月間中断していた干拓工事を再開した。

漁師を悩ます謎の浮遊物

「国にはかなわんという意識が強かった漁師たちが必死に声を上げ、佐賀地裁で工事中止の仮処分決定を勝ち取ったんです。このまま高裁でも行けると信じていただけに、負けたショックはたいへんなものです」

島原市の漁師・吉田調啓さんはその話す。諫早湾口から南へ一五キロほどの島原で養殖コンブやマナガツオ漁などで生計を立てる吉田さんによれば、諫早湾を潮受け堤防で閉め切ってから漁獲が減少し続け、以前は湧いてくるように捕れた魚がほとんどいなくなった。特に水揚げが良かった車エビが激減しているという。「諫早湾の閉め切り前は好漁で、湾

の入口あたりまで捕りに行きました。最高で一日に一四キロ捕ったこともありましたが、今はほとんど捕れません。湾口に近づくほど少なくなっています」

漁獲が最も少なかったのは、湾閉め切りから二年後のこと。二カ月半の漁期を通じて捕れたのは、わずか六四キロだったそうだ。それでも、養殖コンブの水揚げにはほとんど影響が出ていないので、何とか漁は続けている。ただ、ここ数年、ヨコエビ（ドロクダムシ）が異常発生しコンブに付着するようになったため、

収穫して干す前に、タワシで洗い流す手間が増えて困っているという。

さらに、島原沖などで数年前から得体の知れない粘着性の浮遊物が出現するようになり、刺し網にべったり付着して魚が捕れなくなる被害をもたらすようになった。諫早湾が閉め切られる前には見られなかったこの物体は、漁師たちから「謎の浮遊物」と呼ばれている。

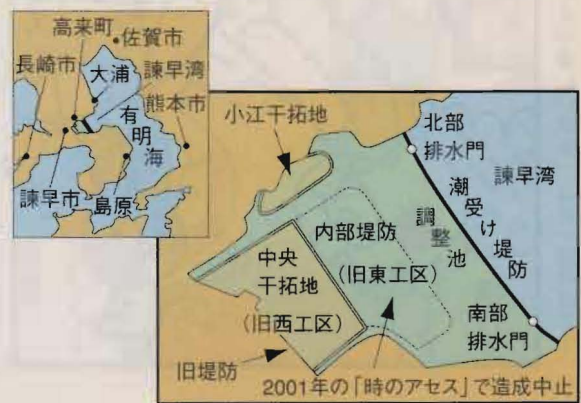
「四月末から五月中頃にかけて、調整池の水が湾外に排出された数日後に発生しています。一度現れると二〜三週間は続き、パタリとなくなる

漁師たちの叫び

諫早湾干拓事業の行方

一九九七年の「ギロチン」閉め切りから八年、諫早湾周辺の海に異変が起きている。この五月には、福岡高裁で干拓工事差し止めを取り消す決定がなされ、さらなる影響は必至だ。諫早の闘いはまだまだ続く。

写真・文 早川文象



んですが、その後は不漁が続きます。この証言するのは、やはり島原で漁業を営む中田猶喜さんだ。

この浮遊物については昨年、長崎県の総合水産試験場などが調査を行ったが解明できず、何らかの底生生物が生殖活動で排出したものに浮泥などが絡みついたものではないか、という程度の推測にとどまっている。もちろん干拓との因果関係もわからないままだ。しかし、ノリの漁期が終わって、潮受け堤防の北部排水門から調整池の水が排出されるようになる時期と、謎の浮遊物が発生する時期がちょうど重なるため、中田さんは干拓が関係していることは間違いないと見ている。

中田さんは今、固定刺し網漁でマナガツオを捕っているが、これは、外から来るため異変による影響が少ないからだという。また、以前はメイタガレイを捕っていたが、この魚は幼魚期を諫早湾で過ごして成長する魚だったので、諫早湾の奥部を失った今では、良かった頃と比べると漁獲は一〇分の一以下しかないだろうと話している。



佐賀県竹崎の牟田干潟に昨年からの姿を見せるようになったというムツゴロウ。



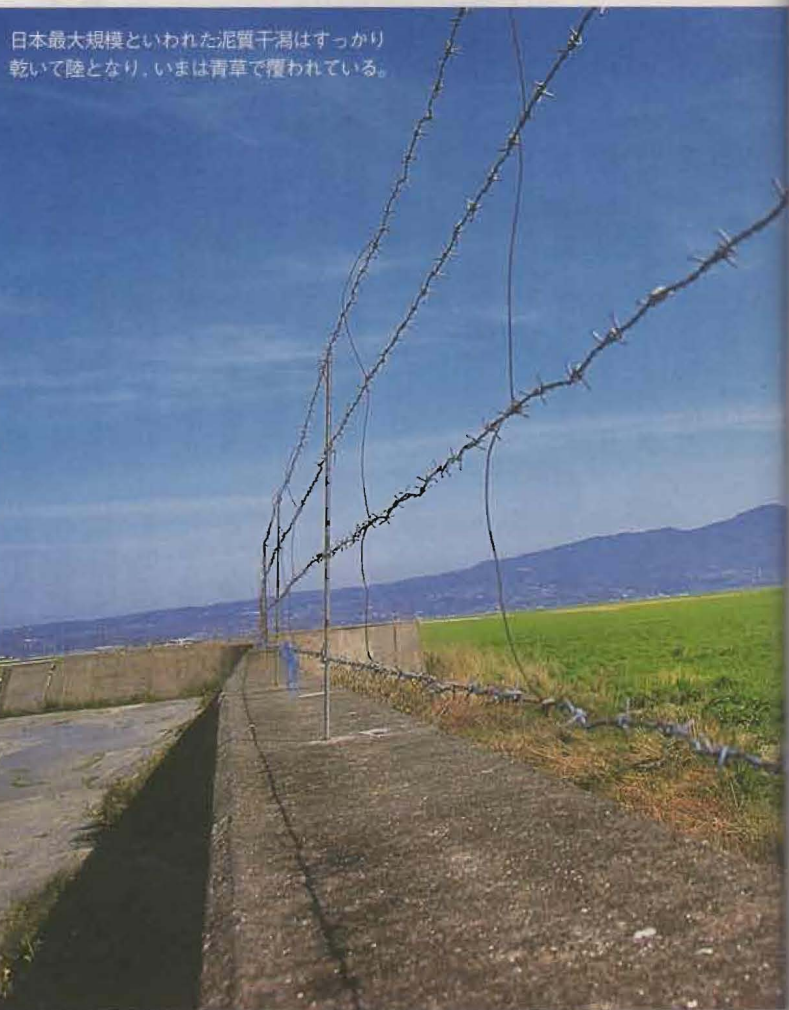
上：湾の締め切りから半年が過ぎた干潟は、すっかり乾ききっていた。(1997年11月撮影)
左：高来町の干潟は観光用に整備され、春は菜の花、秋にはコスモスが一面に咲く。

「有明海異変によるノリの被害も甚大だが、漁獲が下がる一方の漁船漁業の被害も知ってほしい」と中田さんは訴える。

有明海が復活しなければ

諫早湾干拓事業が原因と思われる異変は、漁業者以外にも影を落としている。

佐賀県太良町で漁船を主に製造する造船会社の社長・大鋸豊久さんもその一人。大浦では漁業の柱であるタイラギが捕れなくなり、他の魚も漁獲が減ったことで漁師からの新造



日本最大規模といわれた泥質干潟はすっかり乾いて陸となり、いまは青草で覆われている。

船の受注が激減し、多額の設備投資をした大鋸さんの造船所は危機的状況にあるという。それだけに、有明海が再生し、漁業が復活することを願う大鋸さんの気持ちには、漁師たちにも劣らず強いものがある。

諫早湾が閉め切りになるまでは干拓事業にほとんど関心がなかったという大鋸さんは、一九九七年の閉め切り以降の反対運動、いわゆるギロチン騒動をきっかけに干拓事業に注目するようになった。それ以降、漁民とともに有明海再生を目指して水門の開放を求める運動を続けてきた。

福岡高裁の今回の決定について大鋸さんは、「高裁は、有明海沿岸漁業にどんな被害があるのかをきちんと見てくれない。国は真摯に沿岸漁民の意見を聞いてほしいです。こんな事業がまかり通るなんて、とても民主主義とはいえません」と憤る。さらに、「魚が捕れなければ漁師の家庭が崩れ、個人の生活ばかりか地域の経済や文化までも崩壊してしまっ。なぜ地域社会を壊してまで、入植者もないような干拓事業を強引に進めるのでしょうか」と国や農水省への不信感を募らせている。

「有明海が復活しなければ、漁師にも我々にも将来がないんです。たとえ負けたとしても、地域や次世代のために海を取り戻さなければなりません」。大鋸さんの言葉が重く響

原因調査を拒む国側

一九九七年四月一四日に全長約七キロの潮受け堤防が湾を閉め切つて

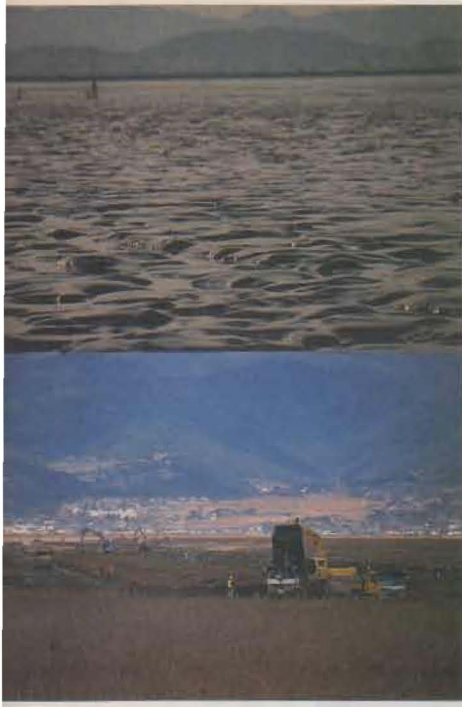


朝収穫したコンブを掛け干しする吉田訓啓さん。

大浦の漁民とともに、干拓事業の見直しを求める運動を続ける大鋸豊久さん。



干潟の保全運動に尽力した亡夫・山下弘文さんの遺志を継ぎ、活動する八千代さん。



上：諫早湾が閉め切られる前、1996年11月頃の干潟の風景。

下：完全に陸と化した干潟で工事が進む。かつて海だったとは想像もつかない光景だ。(2004年)



以来、諫早湾奥部に広がる泥質の干潟は日ごとに干上がり、陸と化した。同時に、「有明海の子宮」とも「海のゆりかご」とも言われた諫早湾の能力は失われた。

閉め切られた湾内の海水は、将来的に農業用水として使用するため淡水化が図られたが、生活廃水が流れ込むため水質は悪化し大量の有機物を含んだ汚濁水となって堤防外の諫早湾へ、有明海へと流出している。

干拓事業がこのような結果を引き起こし、有明海全体に悪影響を与えているとする漁民たちは、事業を見直し、潮受け堤防にある水門を開放するよう求めてきた。慢性的な赤潮状態にある調整池に海水を入れて浄化し、諫早干潟を復元させることが有明海の再生につながるとの主張だ。

ノリ大不作に代表される有明海の異変と諫早湾を閉め切った干拓事業との関係を明らかにし、異変の原因を解明するためには「中・長期開門調査」を行なうべきと、二〇〇一年、農水省が設置したノリ第三者委員会が提言したが、国は二〇〇二年に一月月足らずの短期調査を行なっただけで、肝心の中・長期調査実施については頑なに拒み続けている。

六月七日、福岡・佐賀・熊本・長崎から漁民約二五〇人が集まり、諫早湾干拓の中央干拓地ゲート前で座り込みを行なった。福岡高裁が国の中・長期開門調査への責務について

指摘していたにもかかわらず、調査は行なわずに干拓工事を再開したこ

とへの抗議行動だった。

「国は、開門調査で原因がはっきりしてしまふことを恐れているのでしよう。結局は、工事を進めるための原因隠しでしょうね」。座り込みに参加していた吉田さんが言った。

福岡高裁の決定を受けて、諫早市の諫早干潟緊急救済本部などの市民団体は、中・長期開門調査の実施を国に働きかけるよう長崎県に申し入れた。「よみがえれ！有明海訴訟」の原告・弁護士は福岡高裁に対し最高裁への許可抗告を申し立てた。

「工事の再開については残念ですが、有明海異変と諫早は無関係とする国の主張を高裁も否定しており、争える材料はあるんです。今まで訴えてきたことが反映されていると、漁民たちも元氣を取り戻していますよ」と、弁護士団の堀良一（ほりりょういち）弁護士は言う。

裁判とは別に、国の公害等調整委員会による審理が三月に結審した。公害・環境問題を専門的に解決するために設けられた公害等調整委員会の原因裁定は、干拓事業と有明海異変の因果関係についてどう判断するのか。原因裁定の結果次第では、中・長期開門調査が実現する可能性もある。結論は夏までに出ると見られている。

はやかわ ぶんぞう・ドキュメント写真家。